



TITLE:

<批評・紹介>中國隨筆雜著索引
佐伯富編

AUTHOR(S):

入矢, 義高

CITATION:

入矢, 義高. <批評・紹介>中國隨筆雜著索引 佐伯富編. 東洋史研究
1961, 19(4): 523-527

ISSUE DATE:

1961-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/148193>

RIGHT:

批評・紹介

中國隨筆雜著索引

佐伯 富編

昭和三十五年六月 東洋史研究會刊 本文一一〇
 七頁 序二頁 はしがき五頁 目次一頁 凡例三
 頁檢字表三四頁

この索引の姉妹篇「中國隨筆索引」が出たのは、今から六年前の一九五四年だった。それは前後六年を費やして、種々の悪條件を乗り越えながらの大變な仕事であつたらしい。それを手に持った時のズシリとした重みが、なんだかその六年間の苦勞の堆積を訴えているかのような實感をさえ誘つた。その實感を、私は今でも覺えている。

と同時に、私はそのとき佐伯氏に苦言を呈したことをも覺えている。その苦言の詳しい内容はもう忘れてしまつたし、そのとき書きとめたメモも紛失してしまつたが、ただ最も強い不満として表明したのが、文獻の選びかたにムラがあるという點だつたことだけは、今も忘れていない。つまり、重要な文獻で採り上げられていないものが相當あること、またそれに反して大して重要でない文獻や、原書の目次をそのまま索引に組み入れても、その目次じたいが索引のための項目としては殆んど役に立たぬといった種類の文獻——例えば

「夷堅志」——がかなり採擇されていること、言い換えれば、文獻の選びかたの基準がはつきりしない、ということであつた。

「夷堅志」という怪談集は、いかにも宋代の社會と經濟、民俗と宗教などを調べる上に、非常に有用な資料をたくさん含んでいて、研究者がもつと利用してくれるのを待っている。しかし、この書物の目次を見ただけでは、その各條の内容を類推することは殆んど不可能である。というのは、その目次の大部分は、各挿話の主人公（それも、いわゆる知名の士は稀で、多くは市井人や神怪）の名を掲げたり、その話の生じた地名を示したりしただけのものだからである。こういう「目次」をそのまま索引に出しても、それが檢索の用に役立つことは先ずないであらう。このことは「太平廣記」の目次についてもほぼ同様である。

いきなり憎まれ口みたになつてしまつたが、そこは御勘辨ねがつて、もう一つ付け加えさせていたきたい。やはりその目次に關してであるが、右の「夷堅志」のような特殊な性質の文獻でなくとも、一般の隨筆雜記にもとから附いている目次じたいにも、いろいろの問題がたくさんある。その最も大きな點を一つだけ言えば、目次の表わしかたがその本文の内容全體をカヴァーしていない場合が多いということである——例えば、甲乙の二書で共に同一内容のことを述べながら、甲と乙との目次（標題）は全く異つているというケース、つまり、その事がらのポイントの取り出しがが別々であるというケースが少なくない。そこを索引でどう處置し調整するか、という問題である。原書が與えている目次の通りをそのまま機

械的に索引の項目として掲げたのでは、その文獻の利用價值を或る一部分だけに制約するという結果になり、索引の利用者に對しても不親切だということになる。

しかし、本文を一つ一つ細かく讀んだ上でこままでの配慮を拂うことは、たとひ編纂者にその意はあつても、言うは易く行なうは難きことゆえ、こういう理想論はあまり強くは言い立てないことにしよう。ただし、原書の與えている目次そのものだけに據るとしても、例えば次のような誤りは避けてもらいたかつた。

古文自柳〔宗元〕開始 能10 (中國隨筆索引、二三七ページ右)

右の〔宗元〕という補記は、編者が親切から加えたものであつたが、早計に過ぎた。右の目次の意味は、宋の古文は柳開から始まる、というのであり、そのことは原書(能改齋漫錄10)の本文を見れば直ぐ分かる。目次そのものだけに據つて、本文を讀まずに濟ませておいたためのミスである。とすると、上に述べた私の理想論も、そうあつさりとは撤回しにくくなりそうだ。(序でながら、右の目次は九四二ページの「柳宗元」の項にも重出してあるが、當然それは削除されねばならぬ)。

しかしこんどの第二索引は、前者に比べて改善されたところが多いようである。

先ず、採擇された文獻を見ると、前索引で當然選ばれるべくして漏れた重要なものがほぼ備わつてゐる。演繁露・鶴林玉露・春渚紀聞・學林・丹鉛總錄・野獲編・焦氏筆乘・池北偶談・十駕齋養新錄な

どがそうである。これらの文獻は、それぞれに個別の索引があつてもいいほどに有用な書目である。宮崎博士の序に、「……前書に洩れた重要資料が揃つて含まれているのを見て、安心される讀者も多いことだろうと思う」とある所以である。

ただ、宋の徐鉉の「稽神錄・拾遺・補遺」はいかがであらうか。さきに前索引に採られた「夷堅志」について述べた疑問と同じことが、これにも該當するのではなからうか。率直に言へば、この書は採擇する必要はなかつたと私は考える。また「塵史」はいかがであらうか。今これの中巻の目次を擧げると、賢徳・志氣・度量・知人・不遇・治家……といった文句であるが、こうしたタームをそのまま項目として索引に掲げることが、「隆平集」についても言えそうか。これと多少似たようなことが、「隆平集」についても言えそうである。これは、從來の圖書分類に従えば、隨筆類が屬する「子部」の枠よりも、むしろ「史部」に入るべき内容をもつ書物であつて、その點で本索引の他の採輯書目とは些か毛色が變つてゐる。しかも、その原目次の表記のしかたは、第三卷までは右の「塵史」におけるそれと大體同じであり、第四卷以下は人名だけの羅列である。その點では「皇朝事實類苑」の目次も似たようなもので、ことにその第廿四卷あたりからは、人名と事項名とが錯出して、目次表記上の統一がない、というよりも寧ろ恣意的であり、隨便なのである。(本文内容からすると、人名よりも事項名を標目とする方がより適切である例や、またそれと逆な例が實に多い)。しかし、今またこのケースを論じ始めると、さきに述べた索引編纂工作の基本問題に再びもどることになる。これくらいで止めておくほかはない。

採擇書の大宗は「清稗類鈔」九二巻である。その分量からして、本索引は「清稗類鈔」の索引のごとき観（編者はしがき）を呈する結果となつたが、本書は清朝史の研究家にとつて「百科辭典のような書物」（同上）でありながら、その分量の膨大さと、編集形式の特異さのために、なかなか活用しにくい憾みがあつた。それが今こうして目次を精密に處理し、一つの目次を細かに解きほぐしてそれぞれ別出せたりなどの周到さによつて、その効用度は一新せしめられた。まさに本索引での最も大きなメリットであつたと言える。

二つ三つ小さなことを附言すれば、凡例に掲げられた各項目について、それぞれ依據した版本の種類を示してほしかつた。「金陵瑣事」の巻数が「上下」となつてゐるのは正しくないであらう。正しくは「正編4巻、續2巻、二續2巻」のはずである（上下というのは、恐らく影印本の上下二冊のことか）。また「叢林雜俎」の巻数が「上下」とあるのも、おそらく民國二三年の新文化書社排印本が上下二冊に分冊していたのをういたからのことだらう。原本は六巻のはずである。なお、書目の選びかたについても、やはり些か註文を申し上げたいのであるが一例えば、清の「清嘉錄」が採られていながら、宋の「歲時廣記」が採られていない。兩書はともに時令の書、しかも後者は、前者が吳の一地方のみに限つての記述であるのとは異り、宋以前の佚書をも廣く集成した全般的な記述である——これも煩を避けて省略することにする。

次に索引の内容について、すこし氣付いたことを述べよう。

一つの目次のなかに二つ以上の項目を含む時は、それらを別に掲出するというのが、前索引いらいの方針であるが、時々その方針が

守られていないことがある。一例だけを示すと、五七ページ右の「王元美讀書後毀論」は、「王」の條に王元美のみが掲出されただけで、「讀書後」と「毀論」（ともに彼の著書）は別の項目として出してない。

これと逆なケースでは、「晉人言酒猶兵」（五二七ページ左）という目次は、晉人・酒・兵の三項に分出されているが、右の本文（梁・溪漫志6）の内容は、蘇東坡は酒中の妙を深く解した人だということが主題であり、晉人はこれに軽く對比されているに過ぎない。もともと右の目次（標題）の立てかた自體が、氣の利いたものではあるにしても、本文内容の全體を蓋うだけの表現にはなつていないのである。従つて、「酒」を別出することには一步を譲つても、「兵」を別出することの意味は、ここには全然ないと言わざるを得ぬ。

四八ページ左の「如律令」は、親切にやるなら「急急如律令」と表記して、一八三ページ左の「急急如律令」とのcross-referenceをつけるべきであつた。この種のケースは本索引に少なからず發見される。

八四二ページ右の「梅衡湘論友」は、もし親切にやるなら「友」の下に「袁小脩」と補つてほしいところ。この人物こそが本文の主人公なのだから。同じように、七七八ページ左の「唐詩選本」にも、「唐詩鼓吹・詩歸」と補記してほしかつた。これと同じケースもまた非常に多い。私が今またここに、すでに上に述べたのと同じ苦言を呈するわけは、編者の「はしがき」のなかに、

「前索引は目次のみ、索引は目次のみなら

ず、本文中の重要な項目をも摘録して、目次とともに排列した」と宣言してあるからなのである。はじめ私は「はしがき」のこの言葉を讀んで、ほんとうに欣喜の思いを禁じ得なかつたのだが、率直に言わせてもらうなら、その後すこしづつ不安の念が萌しはじめている。但し、「清稗類鈔」に關する限りでは、この不安は恐らく不要であろうと思われる。

まだ指摘したいことはたくさんある。しかし、それらを一つ一つ取り上げてゆくと、またしても問題はすべて私が上に繰り返して述べた基本的な問題へ歸着せざるを得なくなる。そこで、次には別のことを述べてみたい。それは、今後に期待さるべき第三の索引に對する私の希望を述べることになるが、つまりこの次の段階では、原書に目次があるかないかは度外視して、文獻の利用價值そのものを基準として選定していただきたい、と思うのである。目次を具えた隨筆類の文獻で重要なものは、すでにこの二冊の索引にほぼ採擇され盡くしたから――漏れたもので重要なものを一つだけ挙げよと言われたら、私は「茶香室叢鈔・續鈔・三鈔・四鈔」を挙げたい――今後は目次なきものを手がけてゆかねばならぬ順序である。

これに關連して、一つだけ補つて指摘しておこう。それは、本索引に蘇轍の「龍川略志」が採擇されているながら、同じ著者による補篇「龍川別志」が選から外ずされているという、一見奇異な扱いかたである。その理由は實は簡單なのであつて、「略志」には目次があるが、「別志」には目次がないから、というだけのことである。目次の有る無しだけで姉妹の仲が割かれよ

うとは、しかし氣の毒な話である。でなくとも、このままではスッキリしないものが残るのを、どうしようもない。これをどうスッキリさせるかという技術的處置は、けつきよく目次の有無を當面の選擇基準にしないところへ問題を導くことになる。

そして、そのような目次なき文獻で、なかには目次ある文獻よりも遙かに重要な、従つて利用價值の豊かなものがたくさん存在することは、今さら取り立てて言うまでもないことである。いま、宋人の著述だけに限つて、思い出すままに列挙すれば、涑水記聞・邵氏聞見錄・春明退朝錄・燕翼詒謀錄・愧郛錄・歸田錄・雞肋編・泊宅編・雲麓漫鈔・避暑錄話・石林燕語・老學庵筆記・澠水燕談錄・青箱雜記・夢溪筆談・文昌雜錄・玉壺清話・東軒筆錄・寶退錄・吹劍錄・鐵圍山叢談・墨客揮犀・曲洧舊聞・清波雜志・獨醒雜志・細素雜記・雲莊漫錄・游宦紀聞・蘆浦筆記・志雅堂雜鈔など、そのほかに小粒ながら充實した内容をもつものからも適宜に選定して、こちらの方でその一條一條について、幾つもの角度から扱えた項目を取り出して索引に編成する、という工作が必要となる。これに似た仕事をした先人の例がある。それは、明の謝氏の「五雜俎」の各巻につき、その一條一條について目次を作つてリストとしたもので、わが江戸時代の某氏（今その名を忘る）の作。いま神田喜一郎氏の珍藏せられる寫本がある（これと同じことを、私は明の「菽園雜記」と「戒庵漫筆」について試みたいと思つているが、まだ果たさない）。これは手數のかかる仕事であり、しかも、何人かで共同でやるという方法にも種々の支障を伴うことは明らかだから、非常にむづ

かしい仕事になることは歴然としている。しかし、いずれは是非やつておかねばならぬ基礎的な仕事である。

かつて丁傳靖氏の編んだ「宋人軼事彙編」（一九三五年初版）という便利な本がある。歴史家に限らず、今でも廣く愛用されているが、この本の體例は、最終巻を除いては、すべて列傳式に人を中心とした編集である。もしこれを事を中心としたものに改編したら、本書の効用はさらに高いものになるだろう、と私はかねがね思つてゐる（これに關連して再び上述の「隆平集」と「皇朝事實類苑」の目次の扱いかに言及したいが、やめておく）。そして、こういう整理工作をやる場合には是非缺かせないことの一つは、事がらと人の雙方それぞれについて、二種以上の文獻の記述内容に相互連關がある場合には、項目抽出の過程において必ず cross-reference を考へるということ、そして、後世の隨筆には前人からの轉引や、時には剽窃さえ珍らしくないから、出来る限りその本を突きとめて指摘しておくことが必要である。

新中國においても、一九五九年以來、「明清筆記叢刊」や「元明史料筆記叢刊」などといったシリーズが引きつづいて刊行されているし、またそれと並行して、上海の張心逸氏が「歷代文史索引」という膨大なインデックスを編纂中だと聞いている（但し、目次をもたぬ文獻を氏がどう處理されるかについては分からない）。この種の工作の重要性が、かの國の學界でも同じように認識され來つたわけである。どうか佐伯氏を始めとする同志のかたがたが、今後ともこの地みちな仕事を發展させ擴充させて、世界の學者をますます益せられんことを、心から期待したいと思う。

今この一文を自から讀み返してみても、どうも苦言ばかりが多過ぎたやうな氣がする。といつて、ことさらにアラ探しをしたり、甚ものねだりをするつもりは毛頭なかつたのだが、結果としては、甚だぶしつけない評言ばかりが並んでしまつた。なかには釋迦に説法的な部分もあつたかも知れない。しかし他意は全くないのであつて、つい私のいつもの癖が出てしまつただけのこと、ひらに御容赦を願いたい。（入矢 義高）

中國善書の研究

酒井忠夫 著

昭和三十五年八月 弘文堂刊 本文四八五頁 序
文四頁 目次四頁 索引七頁 圖版一二

本書の著者酒井氏は、かねてから中國における儒佛道三教の關係、あるいはその基盤となる社會が、相互の相關關係によつて如何なる現象を示したかということに關する研究に、たゆまぬ努力をつづけてこられた人である。今回本書の刊行がなつて、これを手にとつて拜見した時、今までの多くの研究成果が、まことにみごとな體系の下に、綜合化されたことを如實に知つて、今更ながら著者の眞摯な研究に頭さがる思いがする。

ところで本書の題名にある「善書」とは何であるか。一般には、しばしば「善本」の意味にとられるそうである。それほど善書という言葉が案外に一般の人々には知られていない。それは一つに「善書」と銘うって解説した書物が、今までに殆んどなかつたからであ